

# 2015 年度 中世史グループの活動

伊藤 啓介

(総合地球環境学研究所)

## 1. 活動の概要

中世史グループは日本における「中世」とその成立期、おおむね 10 世紀から 16 世紀を対象として活動している。この大きく社会が変動した時代は、気候変動もまた非常に振幅の激しい時代であった。本プロジェクトの最終的な目標である、「気候変動に強い社会システム」の条件や教訓を得るためには、この時代の分析が必要不可欠といえよう。

2015 年度の中世史グループについては、最初に悲しい報告から始めなければならない。グループのメンバーで、歴史地理学・環境考古学がご専門の河角龍典（立命館大学教授）が、4 月 13 日に 43 歳の若さで永眠された。河角さんは、平安京などにおける GIS を利用した詳細な地形復元の成果を生かして、古代から中世にかけての京都盆地を中心とした日本の地形変遷と気候変動の関係の解明に、並々ならぬ意欲をもっておられただけに、プロジェクトとしても残念でならない。河角さんが残されたさまざまな研究課題を、一つでも多く、これからプロジェクトの中でも深めていけるよう、努力していきたい。

つぎに報告すべきは、この年の日本史研究会 4 月例会で、プロジェクトメンバーによる報告が行われたことである。日本史研究会は 1945 年に京都で発足した、会員 2,600 名余を数える、全国規模の学会である。その例会は原則毎月 1 回行なわれ、年 1 回、10 月に行なわれる大会とともに、日本史学界全体から注目されている。2015 年は、4 月 25 日（土）に京都大学吉田キャンパスで開催された。「古気候学データとの比較による歴史分析の可能性」と題して、プロジェクトリーダーの中塚武（地球研教授）、中世史グループからはグループリーダーの田村憲美（別府

大学教授）、近世史グループからはプロジェクト研究員の鎌谷かおる（地球研プロジェクト研究員）が報告した。本報告の内容は後日、『日本史研究』646 号に特集として掲載された。

もう一つは、先史・古代史グループとの共同の動きである。院政・平氏政権・鎌倉幕府というかたちで古代から中世に時代が移行していく 10 ～ 12 世紀は、中世を通じて地域社会の基盤となる荘園と、その基礎となる中世村落が形成された時期とされている。考古学の成果を参照すると、これらの中世荘園の開発の時期は、全国的な集落遺跡の増加、新たな用水系の整備、さらに地域の田畠の形状に残る条里の施行など重なっていることが多い。とくに田畠の条里や用水系の整備は降水量の変動と関係が深いと考えられるため、大阪の池島・福万寺遺跡など田畠や用水系の変化の様子がよくわかる遺跡を対象に、先史・古代史グループの全面的な協力を得て研究をすすめる方針である。

また、2014 年度に設定した二つの大きな目標である、「①全国横断的な気候変動と社会との関係の検討」と「②特定の場所について中世を通じた気候変動と社会の関係を時代縦断的に定点観測」をすることについては、今年度は以下のとおりの作業を行なった。

まず①については、全国の県史レベルの自治体史の資料編等から、気象災害にかかわるキーワードを含む史料を抽出する作業を昨年度より継続して行なっている。つぎに藤木久志編『日本中世気象災害史年表稿』（高志書院、2007、以下、『藤木年表』と略）に収録された史料群について検討した。『藤木年表』とは藤木久志氏（日本中世史）が、中世社会の風水害や干ばつ、虫損、それらを原因とする凶作や飢饉や疫病の情報を、中世の記録や古文書の中から

収集した史料集である。901～1650年までの気象災害関連史料（約1万4千件）を収録しており、個別の災害史料については、「天変地異などの記事」として原文の一部・年月日（和暦・陽暦）・場所・出典（原典・書誌情報）が掲載されている。これをもとに、一年ごとの早魃や長雨といった気象災害の件数の推移と、気候復元データとの比較を行ない、とくに歴史上の「大飢饉」の時期について詳細に検討した。

次に②については、東寺領上・下久世荘関係の史料を抽出し、そのなかから気象災害関連語彙を含む史料を抜き出す作業を昨年度より継続している。念のため、東寺領上・下久世荘について述べておく。桂川西岸に位置する、東寺領上・下久世荘（現在の京都市南区上久世町ほか）は、鎌倉時代から存在が確認されているが、南北朝時代に足利尊氏により東寺領となって以来、戦国時代末まで東寺にとって重要な荘園のひとつとして支配され続けた。東寺百合文書（東寺に伝えられた中世文書。2万5千通を数える）に大量の関連文書が伝来しているが、そのなかには、桂川から農耕のためにひかれた用水路について多くの絵図があり、その絵図が描かれた経過や、桂川右岸一体の各荘園・村落間での用水路の管理や整備・修理をめぐる交渉の様子などがわかる文書もあわせて伝わっている。この用水路は現在でも利用されており、文書の残存状況もあいまって、中世以来の用水路の利用の様子をたどれる希有な地域となっている。2015年5月31日には、中世史グループで現地巡見を行なった。詳細については「4. 具体的な活動」の該当欄をご参照願いたい。

## 2. 研究活動（個別）

各メンバーの、個々の研究題目は昨年度から変更はない。以下のとおり記す（順不同）。

田村憲美「中世における気候変動と社会の対応—地域社会・荘園制・村落の視座から—」

水野章二「11世紀末～12世紀における気候変動と中世社会の形成」

西谷地晴美「最新古気候データによる平安・鎌倉期の気候条件」

伊藤俊一「15～16世紀における水干害と復旧・再開

発」

高木徳郎「中世荘園制の成立・展開と気候変動の関  
係に関する研究—地域社会の動向を軸と  
して—」

土山祐之「能登・岩井河用水の相論と気候・損免」

伊藤啓介「藤木久志編『日本中世気象災害史年表稿』  
を利用した古気候史料の研究」

## 3. 来年度の動向

今年度の活動のうち、来年度に直接つながるものとしては、全国横断的な気候変動と社会の関係について、『藤木年表』などの、中世史料のデータベースを利用し、古文書の年次件数と気候復元データを比較するという、定量的な検討の開始が挙げられる。『藤木年表』に収められている史料は気象災害に関連するものに限定されているが、それ以外の気候変動が出現頻度に関係してくると考えられるキーワード（「麦」・「畠」・「売券」など）を含む文書の、年次の件数の変化を算出し、気候復元データと比較することで、社会と気候変動との関係を定量的に分析できる可能性がある。来年度は、現在公開されているデータベース、特に『鎌倉遺文』CD-ROM版を利用してこの分析を行なう予定である。

## 4. 具体的な活動

### 古代中世移行期の文献史学と考古学についての第1回合同研究会

2015年4月1日（水） 総合地球環境学研究所

中塚 武：趣旨説明

水野章二：12世紀における気候変動と中世社会の  
形成

笹生 衛：関東における河川の変化と集落・灌漑  
用水系—千葉県内、小糸川水系の事例を  
中心に—

高木徳郎：10～11世紀の気候変動と荘園制  
コメント・全体討論

中世における降水量の変動と地形の変化に注目す  
る笹生衛（國學院大學教授）を招き、中世文献史学

と考古学との合同研究会を行なった。まず水野章二（滋賀県立大学教授）から、中世社会の基盤となる荘園制や中世村落が形成された時期とされる 10～12 世紀について、考古学の成果を参照すると、集落遺跡の増加、新たな用水路の整備、さらに地域の田畠の形状に残る条里の施行などが、荘園の開発の時期と重なっている例が全国的にみられることが指摘され、この時期における気候変動、とくに降水量変動が中世社会の形成と深い関係があるのではないか、という指摘がなされた。つづいて、笹生衛から、千葉県内の小糸川水系の事例を中心に 10～12 世紀にかけての河川流路の変化と集落遺跡の分布の変化との関係や、海岸における砂丘形成の変化とその時期など、10～12 世紀にかけての降水量の変化が河川の水量、ひいては流路の変化や海岸線における堆積物の量の変化など、当時の景観や村落立地などに深い関係があったことの指摘があった。そして高木徳郎（早稲田大学教授）からは 10～11 世紀の荘園における「開発」を示す史料の件数の推移や、信濃国の集落遺跡の消長、全国的な国衙遺跡の存続の様子から、11 世紀以前とそれ以降とで段階差が存在することの指摘があった。

#### 日本史研究会 4 月例会

2015 年 4 月 25 日（土） 京都大学吉田キャンパス

「古気候学データとの比較による歴史分析の可能性」

中塚 武：樹木年輪による高分解能古気候復元の現状と新しい歴史学研究の可能性—古気候復元を巡る世界と日本の研究史を踏まえて—

田村憲美：日本中世史研究と古気候復元—その課題と二・三の留意点—

鎌谷かおる：日本近世における『年貢』上納と気候変動

日本史研究会の例会は原則毎月 1 回行なわれ、日本史学界全体から注目されている。当日は日本史研究者を中心に、全国から 78 名の参加者があり、その発言からは、最新の古気候復元の進歩と現在の研究水準の高さ、とくにその手法の多様さや復元データの分解能の高さに対する驚きが伝わってきた。

中塚武（地球研教授）は、近年の高分解能古気候学最新の研究成果や手法の紹介のほか、高分解能古気候データを用いた新しい歴史の可能性などを示した。続いて、田村憲美（別府大学教授）は、高分解能古気候データと文献史料との連関を分析する際の問題を整理したうえで、古気候学からの発信を受けた日本史学が今後どう対応すべきかについて論じた。最後に鎌谷かおる（地球研プロジェクト研究員）は、近世の徴税文書である「免定（めんじょう）」から、気象災害などの影響による課税対象地の変動に着目し、近世史研究における最新の古気候データの活用法の可能性を提示した。報告後の質疑応答では、今後古気候学と日本史学がどのように連携してゆくべきかを中心に、活発な議論がくり広げられた。

#### 京都西郊桂川右岸の中世用水路の巡見

2015 年 5 月 31 日（日）

京都市西郊の桂川右岸を流れる用水路の現地巡見を、玉城玲子（向日市文化資料館館長）の案内で行なった。嵐山渡月橋よりスタートし、大正期の地形図と対照しながら移動。取水口である「葛野大堰（かどのおおい）」をはじめ、5 世紀末に秦氏が開いたと伝えられる用水路が、現代の技術でいまでも満々と水をたたえている様子を見学した。続いて山城国上桂荘（かみかつらのしょう）、さらに下流の久世荘（くぜのしょう）の故地を見学し、荘園絵図や空中写真を参考に、桂川の河道の変化を推定したり、井堰の位置が中世当時と変化している一方で、用水路の分岐地点が中世と同じ場所に存在している様子を見学した。最後に向日市文化資料館にて、今後の中世史グループの研究の進め方について打ち合わせをした。

#### 古代中世移行期の文献史学と考古学についての第 2 回合同研究会

2015 年 6 月 21 日（日） 総合地球環境学研究所

中塚 武：趣旨説明

井上智博：河内平野における 10～13 世紀の地形変化と耕作地の展開

宮島義和：9 世紀後半の大洪水からの復興—更埴条里遺跡・屋代遺跡群の場合—

総合討論

中世における降水量変動と、地形・条里、用水路の変化などに注目する、中世文献史学と考古学との合同による研究会の第2回目。今回は大阪府の池島・福万寺遺跡の田畠・用水路の変化について井上智博（大阪府文化財センター主査）から、長野県の更埴条里遺跡・屋代遺跡群を対象に、用水路遺跡や集落遺跡の廃絶・建設の時期などについて宮島義和（松本市教育委員会研究専門員）から、それぞれ報告を受けた。

井上智博は、河内地方における耕作地開発の変遷過程について、7・8世紀に条里型地割が出現したあと、10～11世紀に再開発の兆しが現れ、11世紀後半～12世紀に本格化する様子や、治水施設の整備が11世紀後半～13世紀に進行する様子などを報告した。

宮島義和は、長野盆地南部における条里制の用水路や集落遺跡の変遷から、律令制「郷」として存在が確認される地域が、9世紀の洪水のあと、10～11世紀の再開発の試みを経て、12世紀以降、中世の「荘」として姿を変え、用水路網が再整備されていく様子を明らかにした。

#### 第4回 中世史グループ会議

2015年9月18日（金） 総合地球環境学研究所

中塚 武：プロジェクト全体の現状報告

伊藤啓介：藤木年表データと気候変動、および飢饉の関係

伊藤啓介：藤木年表データと古気候復元データを利用した、統計的データ分析についての実習

高木徳郎：10世紀末～11世紀における荘園領有の「不安定性」と気候変動

メンバーの個別現状報告

伊藤啓介（地球研プロジェクト研究員）は、『藤木年表』所収の気象災害史料を、「霖雨」「旱」といったキーワードごとに抽出して、「長雨」や「干ばつ」などの気象災害を記録した古文書の件数を年次で導きだして、保延・養和・寛喜・正嘉・応永・寛正・永正といった、歴史上の大飢饉の年の前後30年について、一年ごとの気温や降水量の変動の様子と、気

象災害史料の件数を比較し、定量的に検討した結果をもとに、「大飢饉を引き起こすような気候変動」の様子を報告した。つぎに、同じく伊藤啓介より、上記の具体的な統計的データ分析のための表計算ソフトの使い方の実習を行なった。

つづいて高木徳郎（早稲田大学教授）は、大和国柴山寺領（現奈良県五條市）において、夏季降水量が非常に激しく増減する10～11世を通じて、領有・経営が不安定とされる「免田・寄人型」荘園が維持され、70年にわたって継続した耕作を実現していたことを指摘し、厳しい環境と政治的な不安定さの中でも荘園経営の維持が可能な生産力・経済力・政治力が、12世紀の全国的な領域型荘園の盛行につながった可能性を指摘した。

#### 第5回 中世史グループ会議

2015年12月20日（日） 総合地球環境学研究所

中塚 武：プロジェクト全体の現状

伊藤俊一：山城国上桂荘の耕地の変遷と再開発

笹生 衛：石川県寺家遺跡の紹介

現状報告と総合討論

伊藤俊一（名城大学教授）は、山城国の桂川右岸に存在した東寺領上桂荘について、その耕地の場所の変遷の様子を、河原田の場所の記録や収量の記録から読み取り、明らかにしたうえで、そこから桂川の河道の変化を導き出して、東寺の記録からわかる上桂荘の洪水の動きと照らし合わせた。また村落における復興の動きとその担い手の変化を東寺の記録から導き出し、照らし合わせることで、大水害の発生と気候変動の関連、その社会的インパクトを論じた結果を報告した。そして笹生衛（國學院大學教授）から、石川県羽咋市に存在する寺家遺跡の概要と、砂丘列上の遺構の変化について、9世紀末～10世紀初頭と、14世紀後半の二つの時期に風成砂層が急速に発達して遺跡の埋没があったことから、この二つの時期に羽咋川から海浜部への砂の供給量が増加した可能性、さらにこの時期に降水量の変化や洪水があった可能性が指摘できるとの報告があった。